

3 工事影響の監視

3.1 モニタリング調査計画の視点

本モニタリング調査の最も重要となる視点は、「貴重な環境である右岸干潟生態系の保全」である。そこで、「①干潟の環境は、事業開始後も大きく変化せずに維持されているのか（生息場の視点）」、「②そこに生息する生物の生息状況に事業に起因する変化は起こっているのか（生物生息状況の視点）」といった 2 つの観点からモニタリングの項目を設定した。

第一の「生息環境の視点」からは、橋梁工事に伴って行われる浚渫や建設機器の導入が、干潟周辺の環境に影響を与えていないかモニタリングするため、周辺における「底質及び水質」を調査対象として設定した。

第二の「生物生息状況の視点」からは、干潟の健全性をモニタリングするための調査項目として、この干潟の代表的な重要種である「トビハゼ」と、干潟環境に依存し、なおかつ確認や観察がしやすい「水鳥類」を調査対象として設定した。

また、懇談会での指摘に従って、調査地区周辺を利用し影響を受けることが想定されることから、特にモニタリング時に個体数や利用状況を注視すべき「注目種」を 10 種設定した。注目種の一覧を表 3-1 に示す。

表 3-1 懇談会での指摘に従って設定した水鳥類の注目種

水鳥類調査時における注目種の一覧
カワウ、キアシシギ、チュウシャクシギ、スズガモ、ヒドリガモ、シロチドリ、コアジサシ、ダイサギ、コサギ、ハマシギ

これらのモニタリングは、橋の工事・供用が事業実施区域周辺の生態系に与える影響を監視し、予測されなかった変化が起こった場合にすみやかに対応を図るために実施したものであり、工事前、工事期間中、工事後（供用時）と長期間（1998 年から 2020 年の 22 年間）にわたって実施した。

また、調査項目や調査時期については、懇談会において専門家のご意見を適宜計画に反映しながら実施した。